

第85回全国都市問題会議（青森県八戸市）

令和5年10月25日

貝塚市議会議員 南野 敬介 殿

小谷 真章

【開催概要】

- 日時 第1日：令和5年10月12日（木）9：30
基調講演「アート役割って何だろう？」
主報告「八戸市の文化・スポーツによるまちづくり」
一般報告「まちづくりの活力は地域に根差した文化政策から育まれる」
一般報告「標高差1,500mの地勢を活かしたスポーツ・ツーリズムの創出」
一般報告「まちづくりにおけるプロスポーツクラブの有効活用」
第2日：令和5年10月13日（金）9：30
パネルディスカッション
「文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展」
- 会場 八戸市公会堂・公会堂文化ホール
- 主催 全国市長会、公益財団法人後藤・安田記念東京都市研究所
公益財団法人日本都市センター、八戸市
- 協賛 公益財団法人全国市長会館



第1日

基調講演「アートの役割って何だろう？」

講師 東京藝術大学長、アーティスト 日比野 克彦氏

アートとは美術、音楽、演劇などのかたちで表現されたものですが、そういったアートが人に及ぼす機能、可能性として、地域のコミュニティ活性化、社会課題解決などを、いくつかの実例を挙げながら講演されました。

コミュニティ活性化の例として印象に残ったのは、先ず「こよみのよぶね」です。これは岐阜・長良川で2006年から日比野氏の呼びかけ、発案でスタートした取り組みです。岐阜では、古くから川文化に育まれた工芸・産業が栄えてきたそうです。美濃和紙や、提灯、和傘づくりをはじめ、長良川鵜飼も有名です。そんな岐阜の伝統文化を背景に、和紙と竹でつくった巨大な行灯を鵜飼観覧船に載せて、



て、冬至の夜の長良川に流し、過ぎゆく1年に思いをはせる催しとのことです。行灯は市民の手作りです。作ることで人が集まり会話が生まれているそうです。

水戸美術館で取り組まれている「日比野カップ」は2005年から始まり、アートとスポーツと一緒に楽しめるワークショップとして定着しています。午前にはチームごとに段ボールなどでサッカーゴールとボールを創作し、ペンやカラーテープでTシャツに絵柄を描いてユニフォームを作り、午後にはそれらを用いてオリジナルのミニサッカーで競い合います。親子や友人同士で楽しめるアートイベントとなっているそうです。

「明後日朝顔プロジェクト」は2003年に日比野氏が新潟県十日町市筋平の集落の住民たちと共に朝顔を育てるかたちで始めたのが始まり。現在は26地域が参加しています。育てた朝顔の種を相互に送りあうことで、朝顔の種が人と人、人と地域、地域と地域とをつなぐネットワークの橋渡しとなっているそうです。

社会課題解決の例としては、日比野氏が館長を務める熊本市現代美術館と行政・熊本市の連携が紹介されました。交通局のバス運転手不足対策のためのイメージアップの取り組み、市の第8次総合計画の親しみやすい発信などにアートを活用したとのことです。

海外での先進事例として、英国リバプールのナショナル・ミュージアムが認知症対策として取り組んでいる「ハウス・オブ・メモリーズ」と言う、過去の思い出の品を見ながら、記憶をたどり、思い出を共有するアプリを使った取り組みなども紹介されました。

アートとは、美術館やコンサートホールなど特定の空間で鑑賞するものとの認識でしたが、アートの可能性に目を開かれる講演でした。

主 報 告「八戸市の文化・スポーツによるまちづくり」

講 師 青森県八戸市長 熊谷 雄一氏

八戸市では現在「はちのへ文化のまちづくりプラン～八戸市文化芸術推進基本計画～」と「八戸市スポーツ推進計画」を策定しており、これらと前後した同市の文化・スポーツによるまちづくりが報告されました。



同市は藩政時代からの続く東北地方の中核都市ですが、1990年代以降、中心市街地活性化が課題となっていました。その中で2011年には「八戸ポータルミュージアム はっち」がオープンしました。人が集まる場所とするために、地域資源の魅力を生み出し、発信し、文化芸術、産業、観光、市民活動、子育て支援など多様な施設を一体にしたものです。

さらに人が集まる点（場）を面とするべく、その場に行かなければ得られないもの、出会えない人やコトがある場として、八戸ブックセンター、八戸まちなか広場マチニワ、八戸市美術館など目的や役割が異なり、市民の多様なニーズに応えられる文化施設を、公共交通網の整備と併せながら、歩いて回遊できるエリアに配置しました。

中心街においてまだまだ空きビルが発生する都市再編の途上とのことですが、文化施設周辺では民間による再開発の連鎖が生まれているとのことです。

スポーツ関連では、2019年に防災拠点機能も併せ持つ屋内スケートリンク「八戸市長根屋内スケート場YSアリーナ八戸」がオープンし、翌年には通常はアイスリンクでありながら、半日でバスケットボールコートに転換可能な民間施設「フラット八戸」が開業しました。また、サッカー「ヴァンラーレ八戸FC」、アイスホッケー「東北フリーブレイズ」、バスケットボール「青森ワッツ」、3人制バスケットボール「八戸ダイム」等、4つのプロチームが同市に拠点を置いています。

施設の充実、プロチームの活動は、合宿、国内外の大会などスポーツ・ツーリズムの推進や市民の日常的なスポーツ参加などまちの活性化につながっているとのことです。

地方都市は人口減少、高齢化などで従来からあった地縁、社縁が衰え、それにともなって地域のコミュニティも活力を失いがちです。これに対して、文化・スポーツなど関心やテーマに基づくコミュニティと、それに主体的に参加する当事者を増やすことがこれからは必要になると感じました。

一般報告「まちづくりの活力は地域に根差した文化政策から育まれる」

講師 文化事業ディレクター、演出家 吉川 由美氏

吉川氏は八戸市が中心街再生の起爆剤と位置付ける「八戸ポータルミュージアム はっち」(2011年)の開館準備と開館後のアートプロジェクトに2010年から10年間、携わった方です。「はっち」という箱モノを作るだけで終わらせず、当初の目的を達成するための取組み、気づき等が報告されました。

まちを再生する市民力をブーストするには、市民が自分事として参加できる、分野を横断し壁を揺さぶるアートプロジェクトが必要だったとのこと。

例えば「八戸のうわさ」は、アーティスト 山本耕一郎氏による人と人との絆をつなぐ試みです。中心街で約90の店舗や事業所を取材。まちの人たちの小さな自慢や趣味や悩み、うれしかったことなどを聞き出して、それを「うわさ」風の文体にまとめ、フキダシ型のシールにしました。そのシールがそれぞれの店や事業所のウィンドウに貼り出され、まちに生きる人たちの素顔が浮かんでくる。隣同士も、お互いの知らなかった一面を改めて発見します。

「はっち」開館記念の「八戸レビュー」は88人の市民が88組の市民を取材して、それぞれのエピソードを執筆、そのエッセイをもとに写真家がポートレイトを撮影、「はっち」で展示するプロジェクト。最終的には400人以上の市民が参加したそうです。

印象深かったのは「デコトラヨイサー！」プロジェクトでの、参加者の気づきの瞬間でした。映画「トラック野郎」シリーズのトラックが八戸近辺のトラックをモデルにしたものであることから、スパンコールなどをあしらったきらびやかなデコトラ風衣装をまとったダンサーが市場



や横丁で踊るイベントですが、その一環で、デコトラドライバーと衣装作りに参加した縫製好きの市民が語り合うトークイベントも開催されました。そこで、衣装作りに参加した女性から、デコトラドライバー達が八戸港から築地市場に「運んでくれなかったら、今の水産都市八戸はなかったのでは？」との発言があり、その場にいたすべての人が、普段接する機会のないデコトラドライバーがまちの発展を支えてきたことや、トラックドライバーのプライドに気づいたとのエピソードです。

イベントはお金をかければ体裁を整えることはできますが、大切なのは、参加した住民が主体的にかかわれること、かかわったことで様々な気づきを得られることだと感じました。

一般報告「標高差1,500mの地勢を活かしたスポーツ・ツーリズムの創出」

講師 長野県東御市長 花岡 利夫氏

今回の都市問題会議では、まちの活性化成功のポイントは地域の資源に依拠することと感じましたが、東御市（とうみし）の報告はまさにその典型でした。

同市は、市のほぼ中央を千曲川が東西に流れ、その右岸から浅間山系にかけては標高差が1500mにも及ぶ南面傾斜の扇状地が広がり、左岸は標高600～850mの2つの台地、千曲川および鹿曲川（かくまがわ）に沿った河岸段丘となっています。

市長就任時に思ったことは「特区を何か一つ取りたい」とのこと。標高800mの市域はブドウ栽培の適地で加工用ぶどうの導入が進んでいたことから、「ワイン特区」（2008年）に認定され、今では14軒のワイナリーが存在しており、近々17軒になるそうです。

そしてもう一つ、同市の標高差を活かせるものが「高地トレーニング」でした。東京2020オリンピック・パラリンピック開催が決まり、高地トレーニング施設の適地を探していた日本水泳連盟が同市の湯の丸高原の1750mという標高に興味を持ったことから、計画が具体性を帯びました。

スポーツ施設はすべて公費で設置・運営するのが当たり前という考え方でなく、施設の設置によって利益を得る者（ステークホルダー）等と相互に協力し合うという意識改革、ステークホルダーが建設にあたって、運営に対しても応分の負担をし、地域とともに支えるという発想で取り組んだことが、計画が実を結ぶために不可欠だったそうです。

GMOアスリートパーク湯の丸



施設の建設費は補助金の対象とならず、寄付金5億5000万円、市の起債8億5000万円と自前でまかないましたが、地方債の償還には企業、個人から協力や、運営費が当初想定半分に抑えられたことから、5年で完済できたとの

こと。施設はプールだけでなく、400mトラック、トレーニングマシン、合宿所も備え、ユニバーサルデザインを取り入れたパラリンピック・アスリートも利用しやすいもので、多くのアスリートに利用されています。水泳だけでなくトライアスロン、アイススケートなど幅広いアスリートが集うようになっているそうです。また、一般対象のイベントとしても標高差を活かして、「湯の丸ヒルクライム（自転車）」や「アサマスタークロスウォーク」などが多くの参加者を集めるようになっています。

ワインで人を集める、スポーツで人を集める。地域資源の見極めと、トップの決断があったからこそですが、葛城山麓にはハイカーやスポーツバイク愛好者が集まり、二色の浜にはマリンスポーツ愛好者が集まる貝塚市としても、参考にしてよい事例だと感じました。

一般報告「まちづくりにおけるプロスポーツクラブの有効活用」

講師 株式会社鹿島アントラーズFC取締役副社長 鈴木 秀樹氏

一般的なプロスポーツの地域への貢献としては、試合での集客効果やプロ選手による住民へのスポーツ指導などがイメージされますが、それだけに止まらないポテンシャルがプロスポーツには秘められていると、アントラーズと地域の取組みが紹介されました。

アントラーズはJリーグの発足に合わせて生まれたものです。ただし、その背景には、農漁村から高度成長期を経て工業地帯へと変貌した地域の自治体が、近隣に娯楽施設がなく、若者の首都圏への流出や、新旧住民の融和などの社会問題解決策として、「サッカーによるまちづくり」に活路を見出そうとしたことがありました。

当初はこの地域をホームタウンとするプロサッカーチームは「不可能」と、プロリーグ検討委員会の川淵三郎委員長に言われたそうです。これをうけ、日本リーグの住友金属工業蹴球団をプロ化し、日本初の屋根付きサッカー専用スタジアムを建設するなど、自治体、民間企業、アントラーズが一体となった取組みでJリーグ参画を果たし、地域の活性化、振興を進めてきました。

現在は、鹿島アントラーズが国内最多の20冠を重ね、地域のシンボルとなり、にぎわいをつくり、地域住民の心を躍らせていますが、それだけに止まず、ホームタウン（鹿嶋市、潮来市、神栖市、行方市、銚田市）の社会課題解決にも貢献しています。

同地域は高度な医療、教育機関に乏しく、そのことが、域外からの雇用・移住促進の足かせともなっています。



これに対して、例えばアントラーズでは、カシマスタジアムに隣接する「アントラーズスポーツクリニック」を設立し、チームドクターと理学療法士が整形外科医療、リハビリの高度なノウハウを地域に還元しています。同スタジアム内の「カシマウェルネスプラザ」は地域のスポーツジムとして活用されているそうです。

また、オーナー企業がネットを活用したビジネスを展開する「メルカリ」であることから、小中学校向けプログラミング教育に協力したり、パートナー企業の昭和産業の公認スポーツ栄養士が小学校を巡回して食育教育を行ったり、小学校低学年向け英語教材の動画にアントラーズの選手を起用したりといった事例は興味深いものでした。

アントラーズがパートナー企業とホームタウンの自治体を結びつける接点となり、高砂熱学工業とのカーボンニュートラル、サントリーホールディングスとのペットボトル「水平リサイクル」事業が取り組まれたこと、また、アントラーズに派遣された自治体職員が行政サイドだけでは得られない経験、知見を身につけられる人材育成面での効果、アントラーズの持つ集客力を活かして、自治体施策に活用できるアンケート収集も可能など、アントラーズを活用した様々な利点も紹介されました。

第2日

パネルディスカッション 「文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展」

【コーディネーター】

東京大学大学院人文社会系研究科教授 小林 真理氏

【パネリスト】

合同会社 imajimu 代表取締役 今川 和佳子氏

拓殖大学商学部教授 松橋 崇史氏

静岡県沼津市長 頼重 秀一氏

京都府綾部市長 山崎 善也氏

最初にコーディネーターの小林氏から、「文化観光推進法」が2020年に制定され、各地の自治体が公立文化施設や様々な文化資源を活用する事業に取り組んできた。「一巡した文化芸術を活用したまちづくり」の次には、それらを持続的なものにするために、行政は文化を横ぐしに地域を結ぶこと、地域資源と関連付けたアートやスポーツ振興、それらの事業に関わる人材の育成などが必要になっていると問題提起しました。

これを受けて、今川氏が「八戸の独自性が生み出してきたもの」として、同市の中心市街地活性化の起爆剤「八戸ポータルミュージアム はっち」の開館にあたっての経験が語られました。同市には「はっち」開館前から活動していた「まちなかミュージアムワークショップ」という市民団体が存在し、その団体には食、子育て、観光、教育など多様な分野で活動する市民が参加していました。その市民の八戸にかける熱量の高さが、イベントへの市民参加をうながしました。また、八戸に

は夏の「八戸三社大祭」、冬の「八戸えんぶり」など長年受け継がれてきた祭り文化があり、これも市民のエネルギーの結節点となっています。

「はっち」をはじめ複数の文化・スポーツ施設が整い、これらを市民のポジティブなエネルギーや創造力を引き出す場としていかなければならないと語りました。



松橋氏は「地域活性化におけるスポーツの役割とその変化」として、多様な人々の活躍を目指す地域にとって、多様な人々のスポーツ実施環境を構築することは重要な課題であること、スポーツは勝利するために「全力」で取り組むプロセスを含んでおり、そのことが参加者や観戦者に活力を与えること、そして「全力」で取り組む対象としてのスポーツがパラスポーツやゆるスポーツ、eスポーツなど多様化し、多くの人に参加できるように拡張してきたことなどを述べ、スポーツを地域活性化に活かす視点が重要と結びました。

頼重氏は「スポーツとアニメを活用したにぎわいの創出」として、海、山、川の豊かな自

然に恵まれた市の特性を活かして、サイクリング・マリンスポーツ・ハイキング・トレッキングなどを楽しめるエリアの整備を進め、中心部には屋内スポーツのための施設を設けていること。また、Jリーグ「アスクラロ沼津」のホームであることや、国体のフェンシング会場となったことで「フェンシングのまち」としても施策を強めていることなどを発言しました。市民のスポーツ参加、他地域からの来街者増などで市の活性化がすすんでいるそうです。さらに人気アニメ「ラブライブ！」の舞台となったことで、いわゆる「聖地巡礼」も増加しているそうです。今後は、スポーツ・アニメを通じた取組みを加速させるとのことでした。

山崎氏は「文化芸術・スポーツで紡ぐまち・綾部」として、「市民一人1文化・1スポーツ」を合言葉に、市民ひとりひとりが文化やスポーツで感動や生きる喜びを感じて豊かな人生を送り、また、市内外の交流促進、関係人口の増加、定住促進となる様に施策を推進しているとのこと。文化芸術とスポーツの所管を教育委員会から市長部局（定住交流部）に



移管して、文化・スポーツと地域づくりを一体的に取り組み体制を整えています。ふるさと教育として小中学生には市歌、綾部踊り、綾部太鼓を身につけてもらうようにしていること、合唱が盛んであることから、指導員を市の負担で派遣していること、自然を活かして企業とも連携し、サイクリング、カヌー、トレッ

キングなどの大会でスポーツ観光に力を入れていることも報告されました。

パネリスト各自の報告の後、相互の意見交流が行われました。その中で、「文化・スポーツ施策を進める上での困難な点」を問われ、山崎氏が「事業であるからには収支や期限も考慮しないとイケない。しかし、文化・芸術、地域おこしは、いついつまでに完成ではなく、プロセスが重要で、関わる人達の議論や熱意も大切」と述べられたのが印象的でした。